

秋津公民館図書室蔵書印



う つ り が わ る 秋 津

は　じ　め　に

熊本市立秋津小学校長 野 尻 隆 生

わたしたちのすんでいる秋津の昔の歴史をしらべてみると、すばらしい村だったということがわかります。りっぱな村にするためにわたしたちの祖先の人が大へんくろうしたこともわかります。わたしたちは、秋津の昔のようすを正しく知って、これからの秋津をもっとと良くしていかなければなりません。

秋津校の先生たちは、そのためにみんなで力を合わせてこの本を作りました。あまりしりようがなかったので、秋津町のくわしい人に聞いて歩いたり、たくさんの本もしらべたりしました。しりよう集めだけでも二年間かかりましたが、どうやら皆さんに秋津のことを知っていただくだけのものは集めたつもりです。

本の中のことは、三年生にわかるものにしました。郷土の勉強はおもに三年生からはじまるからです。

また、てっきんの新しい校舎ができますので、それにまにあうようにがんばりました。新しい校舎が出来てうれしい皆さんへの、わたしたちからのプレゼントです。

古いことばに

「昔のことをよく勉強しなければ、新しいことはわからない。」
というのがあります。

みなさんは、この本をもとに秋津小学校のなりたちや、秋津校区のうつりかわりをよく勉強して、わたしたちの秋津がもっともとりっぱになるようにがんばってほしいと思います。

最後になりましたが、この冊子作成のために、資料提供、並びに色々ご助言いただきました校区の各位に厚く御礼申し上げます。

昭和五十四年三月一日

校歌

一、朝日ににおう大阿蘇を

あおぐひとみも かがやいて

いつも明るく むつまじく

よい子は学ぶ ひとすじに

光あふれる 秋津校

二、はるばるひらく秋津原

みどりの風に 胸張って

みんな楽しく 元気よく

よい子は伸びる すこやかに

力みなぎる 秋津校

三、秋津の川に 影うつす

四時軒塾の あとふんで

さらに正しく たくましく

よい子は描く 理想郷

希望はたかし 秋津校

もくじ

一、学校のうつりかわり 4

秋津小学校の誕生

ふえる児童数

学校の中のくらし

落穂ひろい

のばしの山

兵舎といも畑

分散授業

六・三制が始まる

熊本市立秋津小学校となる

給食が始まる

プールができる

二階建ての校舎ができる

若葉校ができる

創立八十周年をむかえる

桜木校ができる

体育館ができる

ミニ・バスケットチーム

三階建ての校舎をたてはじめる

明るく正しくたくましく

二、くらしのうつりかわり 12

(1) 秋津の人々のくらし

農業をする人々

農家の仕事

むかしの農具

(2) 水とのたたかい

野水

江津塘と秋津の水害

「万蔵井手」と「しんじゃー堀」

木山川と赤井川の改修

「土地整地組合」

ポンプ小屋

樋門と六反堀

沼山津せきと秋田せき

突井戸

畑地開田

続けられる工事

三、秋津の道 21

むかしの道

川の交通

木山県道

村の道路

秋津校のうらの道

中学校まえの道

四、秋津のまつり 26

(1) 子どものくらし

てっだい

「ネンガラ」

(2) 秋津のまつり

つなひき

もぐらうち

水神さんのまつり

観音さまのまつり

妙見さん

武内神社のまつり

沼山津神社のまつり

宮座

地藏尊まつり

五、秋津の遺跡 31

貝原

沼山津縄文遺跡

上津代里・中津代里・下津代里

三官屋敷

沼山津手永の会所あと

船つき場

天神木

弥富邸

志内邸

横井小橋と四時軒

六、秋津のお宮とお寺 37

沼山津神社

武内神社

中無田熊野神社

光輪寺

浄福寺

中津代里地藏

彼岸地藏

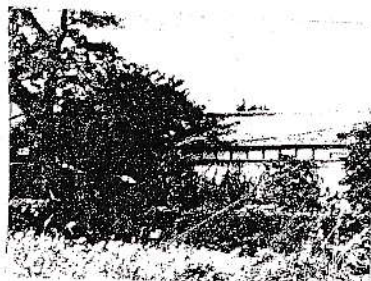
うぐいす観音

一、学校のうつりかわり

秋津小学校の誕生 今から百二十年ほどまえの江戸時代、沼山津村と秋田村に寺子屋がありました。そこでは男子ばかりに、習字を教えていました。その後明治七年に、それぞれ学校ができました。今の上田隆さんのやしき内に沼山津小学校が、野間に秋田小学校がつくられました。

最初は、学校に行く子供は少なく、年令もはっきり決まっていませんでした。学問のたいせつなことがわからなかったからでしょう。また「女子には学問はいらぬ」という考えもあって、女の子はごくわずかでした。

明治二十二年（一八八九年）に、市町村制というきまりができ、沼山津小学校と秋田小学校が一つになることになりました。今の場所に新しい校舎がたてられ、わたし達の秋津小学校が誕生しました。第一代の校長先生は、飯田勝雄先生でした。



沼山津校のあと地

ふえる児童数 明治二十四年、小学校は尋常小学校とよばれることになり、読書、そろばん、習字を教えました。そのころは四年生までで、児童数一八名、二学級の学校でした。しかし、だんだん児童数がふえ、三十二年には三学級、三十四年には四学級になり、女子の数も男子とあまりかわらなくなりました。勉強する児童がふえたことはいへん良いことなので、県から、就学奨励一等旗というものをもらったそうです。

三十五年には校地も広められ、二教室が新築されました。又、沼山津から学校への通学道路も広くなりました。三十八年には高等科がつくられ、四年生を終えた人が、さらに二年間の勉強を続けることになりました。そのため、学級数は五学級になり、児童数も二五八名となりました。

明治四十年、教育のきまりがかわって、高等科がなくなり、今のような六

年生までの学校になりました。その後校地も一六三三坪（約五四〇〇平方メートル）に広められ、校舎も六教室が新しくたてられ、児童数三四二名の、そのころとしては大きな学校になりました。

学校の中くらし そのころはまだ、学校に行かない子どももいましたが、だんだんときまりがきびしくなったので、大正時代になると、子もりをしなから学校にかよう子どももいました。わらぞうりや下駄をはき、時には、はだしで通う子どももいました。男子はぼうず、女子はおさげで、みんなもめの着物を着ていました。べんとうは、にぎり飯に梅干しやうりづけなど、かんたんなものでした。

勉強は、修身、算術、読み方、綴り方、書き方唱歌、図画、手工、体そうなどがありました。四年生になると、裁縫、理科がくわわり、五年生から地理、国史などもありました。図画はクレヨンを使い、四年生からは、えのぐになりました。

又、大正時代になると、四年生から旅行がありました。馬車五、六台に乗って、河内に行きました。五年生は三角旅行で、朝四時に出発して、熊本駅まで歩いて行きました。そこから三角港までは、汽車で行きました。六年生になると大牟田旅行で、やはり駅まで歩き、汽車で行きました。子どもたちはみんな、ぞうりをはいて行きました。



大正時代の身なり



広い田んぼ

そのほか、春と秋に運動会が、三月に学芸会がありました。村内では、弁論大会も行なわれました。落穂ひろい 昭和十二年ごろ、日本は、中国との戦争を始めました。広い国、中国での戦争は、いつ終わるかかわらない状態でした。さらに、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が始まりました。中国との戦争が広がって、中国・アメリカ・イギリスなどの、連合国

との戦争になってしまいました。

秋津の村か も、たくさんの方が戦争に行きました。働き手をうしなった家では、田植えやいねかりの時に困りましたので、上級生が手つだいに行了きました。木山川の向こうは、広いたんぼでした。いねかりがすんだそのたんぼに、全校児童いっしょに、落穂ひろいに行きました。わずかなお米でも、たいせつにしなければならぬ時代になっていました。

のぼしの山 戦場は、南方の国々や、太平洋の島々でしたが、昭和十九年ごろになると、B 29の空しゅうにそなえて、運動場に防空ごうがつくられました。今の体育館のところに、穴を掘ってつくりました。空しゅうけいほうのサイレンがなると、子どもたちはみな、その防空ごうの中に避難しました。又、登下校のとちゅうにサイレンがなると、今の有楽園のあたりが、よい避難場所でした。そこはそのころ、木の枝が伸びほうだいの森になっていて、「のぼしの山」といわれていました。

兵舎といも畑 又そのころ、学校の北がわの校舎（今、新しい校舎をたてているところにあった）は、仮の兵舎になっていましたし、運動場の半分はいも畑になっていました。子どもたちが馬ふんを集めてきて、それを肥料にしました。食糧が、だんだん足りなくなっていました。

分散授業 昭和二十年になると、日本各地が空しゅうを受けるようになりました。全校児童は、いつも防空ずきんと救急袋とを身につけていました。赤チンキやほうたい、いり大豆やなつ豆などを救急袋の中に入れていました。そのころは、洋服や靴も手にはいりなくなり、女子はもんぺをはいて学校にきました。

B 29の空しゅうがますますはげしくなると学校にかようことが危険になりました。そこで、町内ごとに集まって、勉強することになりました。一、二町内の子どもたちは、小楠公



園に、ござやむしろを持って集まりました。先生方が各町内に、それぞれ出かけて行きました。

六、三制が始まる 昭和二十年八月十五日に戦争が終って、新しい考えのもとに勉強を始めることになりました。昭和十六年四月から秋津国民学校とよばれていたのをあらためて、秋津小学校とよぶことになりました。昭和二十二年四月から、すべての児童が、小学校六年、中学校三年の勉強をすることになりました。これが「六、三制」です。平和と民主主義の考えのもとに、男女いっしょに勉強する、新しい世の中になりました。



熊本の野原焼
昭和21年

しかし戦争のあとは、食糧も、毎日のくらしに使う品物もたりなく、子どもたちの学用品も、じゅうぶんにありませんでした。そまつな教科書と用紙を使って、勉強しました。

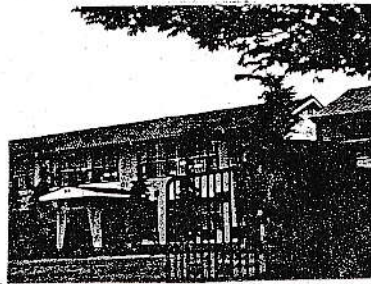
熊本市秋津小学校となる 戦争のために荒れていた学校は、だんだん、ととのえられていきました。いも畑になっていた運動場も、もとどおりになり、鉄棒やシーソーやブランコなどが取りつけられました。阿蘇登山や臨海学校、運動会なども行なわれるようになり、とくに学芸会は盛んでした。又、茶つみなどもありました。学校のまわりと、今のプールのあたりに茶の木があつて、毎年五月には、やわらかい芽を出していました。

こうして昭和二十九年に、上益城郡秋津村が熊本市秋津町となると、学校も、熊本市立秋津小学校となりました。その年にも、すべり台やはん登梯などが取りつけられました。

給食が始まる そのころ、子供たちのえいようが、まだじゅうぶんではなかったの、熊本市では、学校給食をして、りっぱなからだをつくるように

しょう、と考えました。はじめは、パンと脱脂ミルクだけの給食でしたが、昭和三十一年に給食室ができ、完全給食になりました。

プールができる 昭和三十四年には、プールができました。それまで、木山川の中無田橋のきわで泳いでいた子どもたちにとって、どんなに大きな喜びだったでしょう。



昭和39年建ての校舎ができる

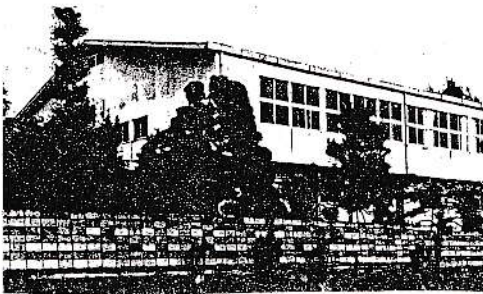
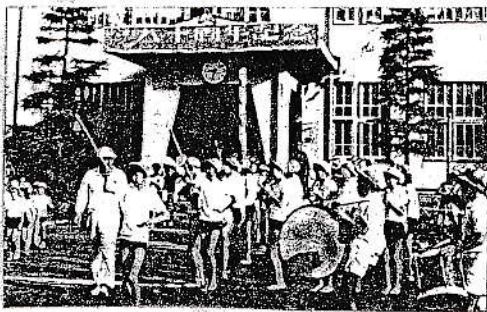
二階建ての校舎ができる 秋津町に住宅がふえるにつれて、学校の児童数も、どんどんふえて行きました。教室が足りなくなりましたので、昭和三十五年、はじめての二階建ての校舎がつくられ、記念の式がありました。その時に、校旗がつくられ、校歌も、応募作品の中から決められました。

その後、昭和三十九年にも、東がわに、二階建て六教室ができ、十七学級の学校になりました。

若葉校ができる 熊本市は東の方にひらけてきましたので、健康地区の児童数がどんどんふえて来ました。そのため、昭和三十七年に、泉が丘小学校の分校として、若葉小学校ができ、秋津小学校の西無田地区の児童が、一部分れて行きました。

創立八十周年をむかえる 昭和四十五年十月二十五日、秋津小学校が生まれて八十年目のお祝いの式が行なわれました。又、文化祭やてんらん会や、大運動会が、記念に行なわれました。記念誌「秋津」もつくられました。それには、先生方や卒業生の思い出などが書かれています。

これまで、六千三百七十一名の人々が、秋津小学校



完成した体育館

で学びました。その中には、後に、東宮伝育館（皇太子の先生、今の天皇の先生）になった弥富破魔雄さん、農林政務次官になった三善信房さん、第七代熊本市長になった高橋守雄さんなどがおります。高橋守雄さんは、三十九才の若さで市長になり、市に電車を走らせたり、水道をひいたり、大きな仕事をしました。

桜木校ができる 秋津小学校の児童数は、年とともにふえ続けました。プレハブ校舎がたてられ、運動場はいっそうせまくなりました。そこで市は、木山県道の北がわに、新しい小学校をたてることにしました。このあたりは、大部分が、秋津校区の沼山津のうちで、沼山津の人たちの農地でした。

昭和四十六年四月、新しい桜木小学校ができました。そこで、秋津校の二百三十名の友だちが、桜木校に分かれて行きました。

体育館ができる 昭和四十二年、体育館の建設を進める会ができ、早く体育館をたてるよう、市にはたらきかけを始めました。体育館は、体育の学習はもちろん、集会や式に、なくてはならないものです。そのはたらきかけが実って、運動場が広げられたり、石垣工事が行なわれたりして、じゅんぴがととのえられていきました。

こうして、昭和四十七年に体育館ができあがり、雨の日でも、体育ができるようになりました。



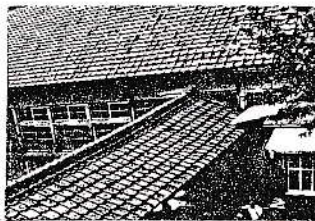
体育館の中で運動

略 P.42 参照

児童数のうつりかわり

ミニ・バスケットチーム 昭和五十年、ミニ・バスケットのチームがつくられました。はじめは、女子だけのチームでしたが、後には男子チームもでき、練習にはげみました。そうして、五十一年、五十二年、五十三年と、県大会に優勝をし、全国大会に出場しました。

三階だての校舎をたてはじめる 昭和五十三年の夏、運動場の北がわ半分に、プレハブ校舎がたてられ、引っ越しを終わると、すぐに、古い校舎がこ



解体前



わされ始めました。鉄筋の三階だて校舎をたてるための、工事が始まったのです、いろいろな機械や道具が運びこまれ、はげしい音が聞こえは解りました。

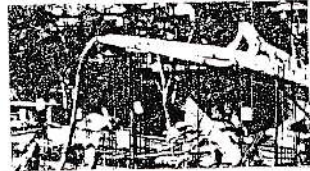
できあがるのは、五十四年六月ですが、このあと、二期、三期と、工

事は続けられて行きます。

- ・昭和九年にたてられた第二校舎、六教室、昭和十九年に三菱から贈られた二教室、プレハブ三教室をこわす。
- ・十二の普通教室と音楽教室・理科室・家庭教室の鉄筋三階だて校舎ができる。(第一期工事)

明るく、正しく、たくましく 木

造校舎が鉄筋校舎に変わり、運動場



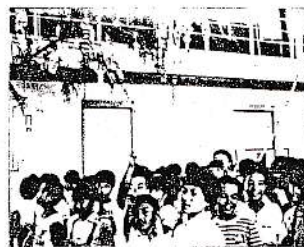
基礎工事



プレハブ校舎

も、南の方に広げられることになっています。学校はうつり変って行きますが、積みかさねられた伝統は、明るく、正しく、たくましい秋津の子どもたちに、受けつがれて行くことでしょう。今、学校は、「しっかりした、そしてゆとりのある」学校生活、ということにはげんでいます。

子どもたちで計画し、子どもたちでする、楽しいもよおし



たなばた集会



おみこし集会



たこあげ集会

二、くらしのうつりかわり

(1) 秋津の人々のくらし

農業をする人々 今から、およそ百年前の明治時代も、秋津では、大部分の人が、農業をして、くらしを立てていました。村には、ところどころに、店があるだけでした。その後の大正時代も、村の七十パーセントが農業をしていたそうで、これは十けんのうち、七けんということでした。

昭和のはじめごろ、秋津村沼山津には、今の一町内に百けん、二町内に八けんぐらいの農家がありました。沼山津は、その地名からわかるように、沼と竹山のおおひとりで、そこに、わら屋根の家々がたっていました。

農家では、つるべ井戸で水をくみ、かまどで、ご飯をたきました。あらい物には、わき水を使いました。ふろは五衛門ぶろで、わらや作物のからをもやすのにべんりでした。そしてふろわかしは、子どもの仕事になっていました。

昭和二十年ごろの農家は、たいてい、馬を一、二頭、飼っていました。それは、今の機械のように、田や畑をたがやす仕事を、馬にさせるためでした。又、馬ごやにわらしき、それを馬にふませると、良い肥料ができました。

昭和二十七年ごろ、農家の数は、六十パーセントにへってきました。会社や店につとめる人がふえてきましたが、そのころはまだ、今の三町内を中無田、五町内を新村とよび、四、六、七町内に家はなく、広々とした畑ばかりが続いていました。

しかし今、昭和五十三年、秋津の家は三千三百五十一けん、そのうち、会社につとめながら農業をしている家は、二百五十けん、農業ばかりでくらす家は、わずかに五十けんとなりました。秋津は、昭和二十九年に、村から町になりましたが、農業の村から、住宅の町にかわってきました。

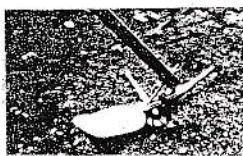
農家の仕事 秋津では、今も昔もかわりなく、米づくりにげみました。まだ機械がなかった昭和三十年ごろまでは、馬の力と人手だけで、仕事をし

ました。まず、「しろかき」という、田づくりをしなければなりません。馬のあとにすきをつけ、人がそれをおして、土を返して行くのです。朝から晩まで、どろだらけになってはたらきました。田うえも人手ばかりでやっていた。赤いしるしをつけた長いひもをはり、十人ばかりの人がならんで、歌を歌いながらうえました。朝早くから夜まで、近所の人もくわわって、二十人ほどの共同作業でした。

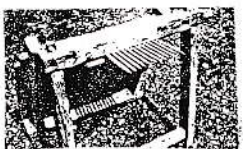
草とりの仕事には、「がんづめ」という、車のついた草取り機を使いました。いねかりも、人が、鎌を使ってしました。秋津の田は水が多すぎるので、板をしいたり、「田げた」（田んぼの中ではくげた）を使ったりして、いねかりをしました。

秋津では、そのほか、あわ・からいも・大豆・小豆・大根・白さい・さといも、などをつくりました。今は、ビニールハウスで、やさいや西瓜、メロンなどをつくっています。

むかしの農具 むかしの農家の人たちが、もったいせつにしたのは、馬と農具でした。馬には、馬車はもちろん、まが、すき、かいてんまが、などを引かせて、仕事をしました。だっこくには、足ふみだっこく機や、せんば、ぶるこ、などという農具を使いました。又、たがやしたり、草取りをしたりするの、くわ、三本ぐわ、とうぐわ、てすき、がんづめ、などを使いました。そのほか、こいじょうけ、そらまめ、み、鎌、とうみざる、足ふみ水車、などがあります。これらはみな、長い年月の仕事のなかから、考え出され、くふうされてきたものです。農家の庭が広いのも、そこが作業する場所だからで、「ねこぼく」という、強い糸であんだ、広い



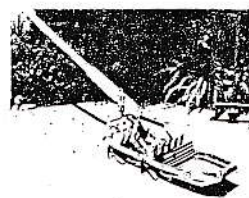
すき



せんば



とうみざる



がんづめの写真

しき物をしき、もみをかんそうさせました。これも農具の一つです。

(2) 水とのたたかい

野水 秋津村は、木山川（秋津川）をさかいに、北がわは土地が高くなっている、広い畑であり、南がわは、赤井川、矢形川が流れて、水田が広がっています。北がわの畑は、火山灰土で、水もちが悪く、雨のすくない年には、作物はかれてしまいました。又、大雨がふると、野水といって、畑の上を川のように水が走り、土を押し流しました。

南がわの、木山川と赤井川にはさまれた水田は、ほんたいに水はけが悪く、まい年、水害にまわれました。そのため、米がとれるのは、三年に一度ぐらいでした。秋津村の「沼山津」とか「無田」とかいいう地名からも、土地のようすがわかります。

江津塘と秋津の水害 熊本城主であった加藤清正は、自分の領土を水害から守り、りっぱな水田を開いて、たくさんのお米を収めよう、と計画しました。その一つが、加勢川の堤防工事でした。江津から川尻方面にかけて、大堤防ができ、それまでは沼地で、役立たなかった江津、田迎、御幸あたりの土地も、みごとに水田になりました。そして、熊本城の米倉といわれるようになりました。

ところが、秋津村の人たちには、大へんこまったことがおこりました。秋津を流れている三つの川、木山川・赤井川・矢形川が、江津塘にさえぎられて、流れが悪くなってしまったのです。雨の季節になると、まい年水害がおこるようになりました。田畑だけでなく、数百戸の民家も、水につかってしまいました。

まい年の水害にこまった人たちは、部落こそって、安全な場所にうつりました。そこが、新村とも上無田ともいわれる、今の五町内です。部落のあったところは、今は水田になっています。

「万蔵井手」と「しんじゅ堀」 くり返される水害にこまった人たちは、

どうにかして水害をなくし、米の収めを高め、くらしを良くしようと考えました。村の人たちは、ちえを出しあい、力をあわせて、努力を続けてきました。そのくふうの一つに、「井手」とか「堀」とかいわれている、用排水路があります。

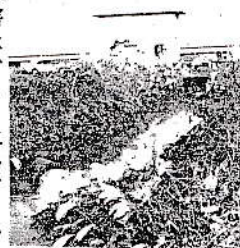
木山川と赤井川のほぼ中央を、西へ流れている井手は、「万蔵井手」といって、その時郡代をしていた、荒木万蔵という人が、江戸時代の文化年間に作った井手です。上流は広安から始まり、中無田の境（六嘉県道）にまで達しています。

又、東無田から西無田まで流れている堀は、「しんじゅ堀」といい、中無田の庄屋、新左衛門という人が、文化年間より前の、寛政年間にほりました。「しんじゅ」とは、新左衛門の名前からつけられたものです。

この堀は、万蔵井手の南がわを流れていて、浦川橋で、流れが一つになっています。このことから、二つの井手や堀のことを、「浦川」とよぶ人もいます。浦川橋のきわに、新左衛門の墓が、今ものこっています。

これらの井手や堀ができたことによって、以前よりも水はけが良くなりましたが、まい年の水害は、かわりませんでした。大雨の時、水田はみずうみのようになりました。その上、堤防はこわれ、橋は流され、民家も水につかってしまいました。江津塘が切れた明治十五年と御船川の堤防が切れた明治三十三年の水害は、とくにひどく、米一つぶもとれず、農家の人々のくらしは、大へん苦しいものでした。

木山川と赤井川の改修 緑川の大改修にあわせて、昭和八年から、木山川と赤井川の改修が行なわれました。加藤清正の江津塘改修につぐ大工事で、上流の新川までの改修でした。工事のお金は、熊本県が出しましたが、秋津村も、お金の一部と、土地とを出しました。百十一人の地主たちが、二十ヘクタールばかりの自分の土地を、提供しました。上流の広安村ともそうだん



万蔵井手

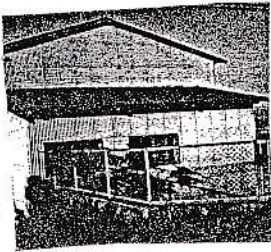
をし、協力してもらって、昭和十一年にできました。

この改修工事で、木山川も赤井川も、川はばが広くなり、堤防もずっと高くなりました。村の人たちは、これで水害はなくなるだろうと、喜びあいました。安心して稲をつくることもできるし、くらしも豊かになるだろう、と思いました。

「土地整地組合」 ところが又、新しくこまったことが起りました。木山川と赤井川にはさまれた水田は、夕立ちの雨水さえ、引かなくなり、水田にたまってしまふようになりました。大雨がふると、二週間いじょうも、水が引かないありさまです。これは、木山川と赤井川の堤防が高くなったので、水を流し出すことが、うまくできなくなったからでした。

そこで、秋津村と飯野村の人たちは、「土地整地組合」という組合をつくり、力をあわせて、土地の改良につとめました。この組合が、さいしょに取り組んだのが、水田の水をくみ出す、動力ポンプの工事でした。組合は、そのほか、排水路やせきをつくるなど、土地改良の工事をしました。

ポンプ小屋 村の人たちが、ポンプ小屋とよんでいる動力ポンプが、赤井川の北がわ堤防に取りつけられています。これは、水田にたまった水をくみ上げて、赤井川に流すしくみになっています。動力ポンプが三つ取りつけ



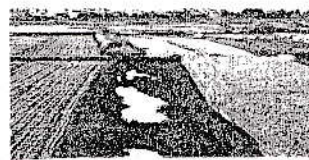
られてあり、直経八十センチの排水管が二つ、五十センチのものが一つ、つながれています。三つのポンプが同時に動くと、一分間に、二百立方メートルの水がくみ上げられます。

この動力ポンプの工事は、昭和二十二年二月から、二十三年七月までかかり、そのころのお金で、二百六十万円ばかりついでしました。しかしそのはたらきで、およそ二百ヘクタールの水田を、なんとか、水害から守ることができるようになりました。

樋門と六反堀 昭和二十六年、又、大水害が起りました。益城平野は大き

なみずうみのようになり、堤防も見えず、ポンプ小屋まで、水につかってしまいました。水田の水は、十四日間も引かず、動力ポンプは、はたらかなくなりました。

そこで考えられたのが、樋門と排水路とをつくることでした。水のはき出し口になる樋門を、二つ増設し、排水路を、四キロメートルほど新しくつくりました。この排水路を、村の人たちは、「六反堀」といっています。又、くしの歯のようになっていようすから、「ながおき」ともよばれています。



堀 昭和二十八年六月二十六日、「六・二六水害」といわれる大水害が、熊本地方におこりました。阿蘇から熊本市にかけて、大きな被害を受けました。その時、秋津の水田も水びたしになりましたが、おどろいたことに、三日間で、水が引いてしまいました。これは、村の人たちにとって、たいへんうれしいことでした。

水はけの良くなった水田には、稲が豊かに実るようになりました。冬の間のうら作もできるようになり、麦や、豆類や、菜種などが、うえつけられるようになりました。

沼山津せきと秋田せき 木山川に、二つのせきがあります。せきというのは、田うえや稲のそだつ時期に、川の水をせきとめて、田に水を入れるためのものです。又、水が多い時には、流れる量を調節することもできます。

沼山津せきは、上沼山津橋のさきにある、福富橋の近くにありますが。このせきは、以前は、石をつみ上げて水をせきとめるだけの、かんたんなものでした。そのため、まい年こわれてしまい、石づみをくり返さなければならませんでした。国からの補助をうけ、村の人たちの奉仕作業もあって、石だたみの、りっぱなせきになったのは、昭和二十八年でした。

秋田せきは、野間橋の西がわにあります。むかしは、せき板を重木でおさ

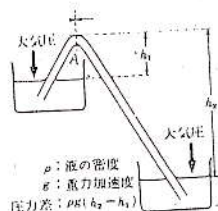
えた、木と板のせきで、くさりやすく、すぐこわれてしまいました。このせきは、昭和二十七年に、つくりかえられ、鉄のとびらが上下に開閉する、りっぱなせきになりました。

突井戸 秋津村の人たちは、水害になやまされてきましたが、はなたいに、水がなくてこまることもありましたが、田うえの時期に雨がすくなく、夜もねずに、水引きをしました。せきは水を引くためのものですが、沼山津せきから取り入れる水だけでは、たりない年もありました。「水あらそい」といわれる、けんかもおこりました。

昭和のはじめごろ、たまたま、豊かな井戸水をほり出した人がいました。秋津からも石油がでる、と信じて、石油井戸をほっていた上田龍三郎という沼山津の人です。たくさんのお金を使って、五年間もほり続けましたが、石油はとうとう出ませんでした。そのかわりに、きれいな水が、どんどん出ました。

そこで、この水を水田に引く計画が立てられました。わき出た井戸水を小川におとし、逆サイホンの原理によって、水田まで水を引くのです。木山川をこえて、上沼山津橋のところから、田に水を入れました。そのため、三十ヘクタールの水田に、水がたたえられました。

昭和十六年には、今の一町内の人たちと、広崎の人たちが話しあって、もう一つ井戸をほりました。その水によって、三十ヘクタールの水田がうるおいました。昭和二十六年に、村役場が、そのくだをヒューム管に取りかえて、この井戸を、今も使っているのです。



サイホン原理図



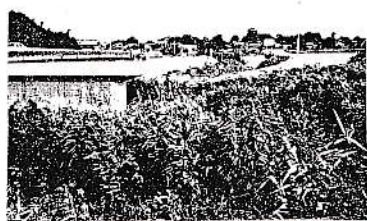
秋田せき

・サイホン：水などを、一度とちゅうの高いところにかけてから、はじめの水などの面より、ひくいところにうつすためにつかう、まがったくのこと。

畑地開田 二つの井戸水で、秋津の水田から、まい年良い米が、たくさんとれるようになりました。しかし農家の中には、水田をもたない「畑百姓」も多く、むかしから、野稲をうえてきました。また、水田をもっている農家でも、水害で米がとれないのをおそれて、野稲もうえていたのです。けれども、野稲をつくるのは、また大へんな苦勞でした。火山灰土で、水もちの悪い畑では、雨の少ない日照りの年など、稲はかれてしまいました。

村の人たちは、畑のすみに井戸をほり、水をくみ上げて、水田にしました。電気モーターを使っていますので、水の調節もかんたんにできます。こうしてできた田を、「畑地開田」といいますが、昭和四十八年ごろから、こがね色の稲ほが実るようになりました。農家の人々は、安心して仕事ができるようになり、くらしも豊かになってきました。

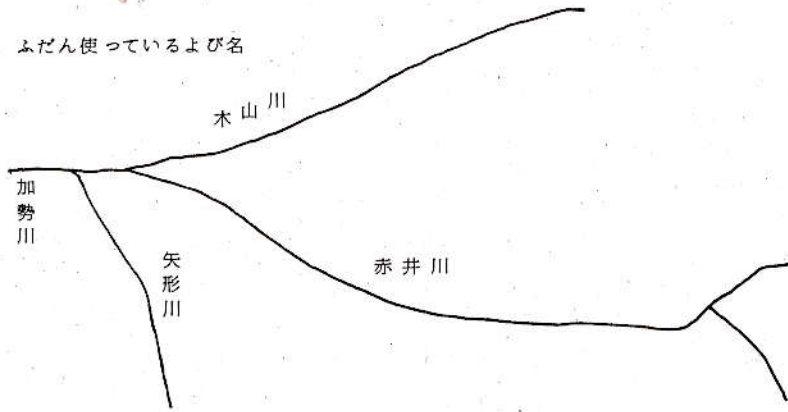
続けられる工事 今、木山川も矢形川も、しずかに流れています。秋津村の人々にとっては、稲を実らせてくれる川であり、水害をもたらず川でもあります。川は、泥や砂を押し流して来ますので、あさくなり、流れが悪くなります。いつかまた、大水が堤防を切って、美しい水田をおそうかもしれません。



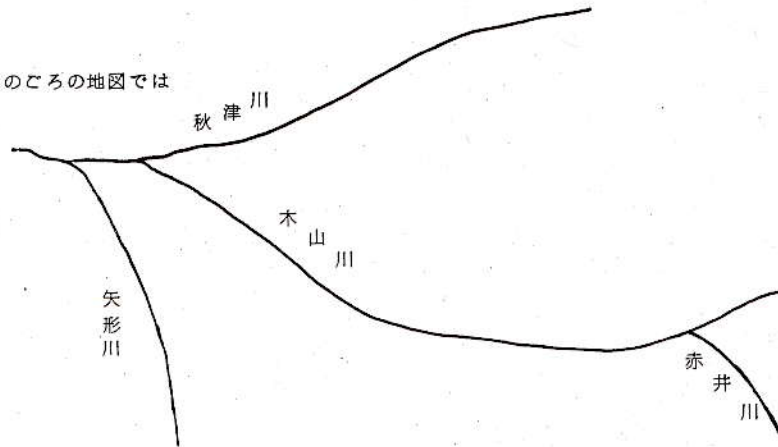
川の改修工事

そこで今、木山川も矢形川も、また大改修が進められているのです。川はばを広くしたり、川底をほって、深くしたりしています。堤防を、コンクリートにしているところもあります。古い木の橋も、コンクリートの大きな橋につくりかえられています。川の流れをかえているところもあります。今では、村の人たちが、奉仕作業をするということもなく、わずかな人たちが機械を動かして、大

ふだん使っているよび名



このごろの地図では



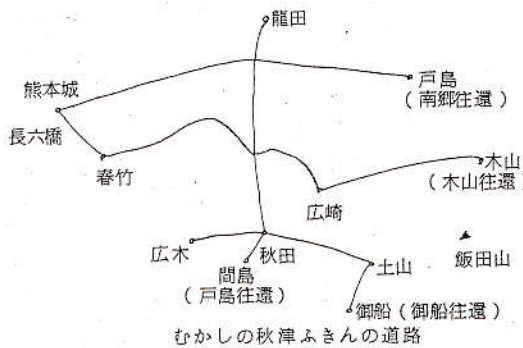
※ 川の名まえは、秋津の人々がふだん使っている、よび名を本文にも使いました。
このごろの地図では、左のように書きかえられています。たぶん、たびたび行なわれ、今でも行なわれている、河川改修のため、地図の上では整理されたものと思われれます。

三、秋津の道

むかしの道 人々のくらしと道とは、大きなつながりがあります。町から町へ道が続いているということは、そこを人が行き来し、品物が行き来したということなのです。つまり、二つの町の人々のくらしが、道によってつながっていた、ということなのです。だから、道をひらくことは、人々の行き来をさかんにし、産業をおこし、くらしや文化を高めることになりました。

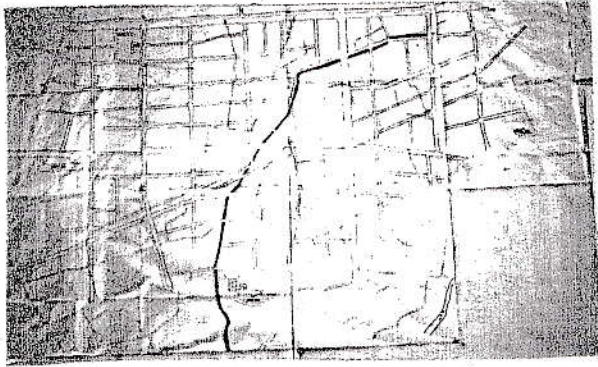
今から三百七十年ほどむかし、肥後（熊本）の領主、加藤清正は、堤防をきづいたり、新しい水田をつくりたりしましたが、熊本を中心として、四方に向かう、大きな道をもつくりました。それは、立田口から阿蘇・大分に向かう豊後街道、出町口から福岡・小倉に向かう小倉街道、長六橋から三船・馬見原をとって、宮崎に向かう日向街道、川尻口から水俣をとおり、出水に向かう薩摩街道でした。街道とは、大通りのことです。わたしたちの秋津は、薩摩街道の川尻に、深いかわりをもっていました。

また長六橋から、秋津に近い木山に向かう道に、木山往還（道路のこと）があります。この道は、八丁馬場・健軍神社をとって、秋津をとおり、立田から、保田・上沼山・東無田をとおり、御船に向かつていました。そのほか、戸島の品物は、戸島往還をとって、間島にはこぼれ、川舟につみかえられました。



むかしの秋津ふきの道路

川の交通 今のようなトラックなどのなかったむかし、川は、たいせつな道路のはたらきをしました。木山川はもっと水が多く、深くきれいで、そのゆるやかな流れを、舟が行き来していました。風の日は帆をあげ、あき瀬ではさおをし、深みではろをあやりました。舟は、上流の広崎から、沼山・中無田・西無田をと



秋津校区新旧道路地図

おり、加勢川をくだって、川尻に行き、荷物をおろして、また川をのぼってきました。山西や戸島などの農産物（米・大豆・小豆・あわ・ひえ）が、川尻に送られていたのです。川をのぼってくる舟には、肥料になる石灰や、しょう油かすや酒かす、などがつまれていました。

また赤井川にも、間島・東無田・新川・赤井をむすぶ舟が、かよっていました。荷物は、馬場楠・道明・戸次などから、木山をとって赤井にはこぼれ、そこから舟で、間島に向かいました。間島は、川の交通の中心になっていました。

木山川も赤井川も、舟ののぼりくだりは多く、とくに、沼山津手永（役所）の上納米をおさめるころ、舟の行き来は、いっそうさかんでした。荷物をつみおろしするところを、船場といい、あちこちにありましたが、今も上沼山津の人家（光岡さん宅）のうらに、そのおもかげがのこっています。

木山県道 政治のしくみが変わって、新しい明治時代になると、鉄道がしかれ、産業がさかんになりました。世の中の動きがかわって、町と村とのつながりも、深くなってきました。

明治二十五年、秋津村の人々は、近くの村の人たちとともに、熊本から木山への、新しい道をねがっていました。みんなの意見が高まって、それがかなえられるようになったとき、県の計画は、砂取から八丁馬場の北を、健軍神社の北にぬけ、花立往還をとって、まっすぐ木山に向かっていました。

そこで村の人たちは、村からはなれた県道の不便さをうったえました。いろいろな人の協力があって、明治二十九年に工事が始まり、三十二年に、今の木山県道ができました。といっても、まだ小さな砂利道にすぎませんでした。

この木山県道を、客馬車が走るようになりました。十台ばかりの客馬車が、安己橋と木山の間を行き来しました。沼山津神社のところに、「たて場」といわれる停留所があり、村の人の客馬車も、四台ほどありました。大正七ごろ、木山から安己橋まで、そのころのお金で十五銭もする、高い料金でしたが、乗りおりがどこでもでき、便利で、昭和のはじめごろまで続きました。客馬車がおるようになって、県道ぞいには、たくさん茶店もでき、だんだんにぎやかになってきました。ラッパをならしながら、茶店の前をとめる客馬車のようにすが、目に見えるようです。農家の人たちも、家に荷馬車を持ち始めました。作物を荷馬車につんで、県道をとおり、熊本へ売りに行きました。

昭和十年ごろになると、木炭バスがかよいました。個人経営のバスで、木山から新市街まで、一日二往復ぐらい走りました。また、太平洋戦争のころになると、水前寺までだった電車が、健軍まで走るようになりました。それは、三菱の飛行機工場が、今の自衛隊、中央紡績・井関農機のところに、疎開（空襲にそなえて、引っこすこと）してきたからです。水前寺からの電車は、まだ単線を走っていましたが、秋津村の人々にとって、交通の便利が、

たいへん良くなりました。

戦後、産交の木炭バスが、木山まで走るようになりました。しかし、昭和三十年ごろまでの木山県道は、道はばはせまく、舗装もされていない道で、バスが通ると、砂ぼこりがひどくまいがありました。県道に近い家では、下水の水を、道にまきました。まわりは、まだ畑ばかりで、県道の北がわには、たたみやさん、天理教の家、そのほか二、三げん、南がわも、わずかに二、三げんの家しかありませんでした。昭和三十八年ごろから、病院などがたてられ、道はばが広げられ、だんだん、舗装もされ始めました。

村の道路 木山県道ができて、馬車がおるようになった大正の終りごろから、秋津村の道も、道はばが広げられたり、新しくつくられたりしました。馬車で荷物をはこぶことが、ますます便利になり、昭和のはじめごろには、川舟は使われなくなっていました。木山川・赤井川のほとりはさびしくなり、道をつくる工事は、どんどん進められて行きました。

今の砂取・御船線は、木山県道から新村で分かれて、野間・横道・六嘉をとおり、大正十二年に、御船・熊本線につながりました。また小池・龍田線は、産業道路として昭和七、八年ごろ改修されていた小峰線と、飯野線とをむすんだものです。ともに、今は県道になっています。

高森・木山線は、昭和二十四年に、阿蘇郡の三つの町や村（高森・久木野・山西）と、河原・福田・木山・広安・秋津の村の人たちが話しあって、道路をつくることをきめ、昭和二十八年から、工事にとりかかりました。山を越えていく、むずかしい道路工事のために、長い年月がかかりました。今では、阿蘇南郷谷と熊本市とをむすぶ近道として、産業や観光に利用されています。

秋津校のうらの道 学校のうらの道は、東から西に、長く続いています。一町内の吉岡商店の前をとって、秋津支所、小学校、水飴工場をすぎ、六嘉県道をよこぎって、広木に続いています。この道は、むかしも、ほぼ今の

道にそっていましたが、道はばはせまく、雨の日は、どろんこ道になりました。学校へかよう子どもたちは、冬の霜どけ、雪どけの道に、とくになやまされました。そこで、この道をなんとか良くしよう、と村の人たちが話しあい、昭和五年二月から、村の人たちの手によって、工事を始めました。今のような、りっぱな道ができたのは、その年の十月十三日でした。

中学校まえの道 秋津村が、熊本市秋津町となった昭和二十九年ごろから、それまで畑だったところに、新しい家がたち、団地もでき始めました。そこで秋津町では、町を美しくとのえ、道はばを広げたり、新しい道をつくったりするために、区画整理をすることになりました。

昭和三十八年から四十年にかけて、秋津新町から二町内まで、区画整理が行なわれましたが、そのときに、東野中学校のまえをとおり、秋津支所へ通じる道路ができました。やがて、市営バスが、秋津支所まえまで来るようになり、町の人たちにとって、たいへん便利になりました。

そのころ、木山県道も、秋津新町から今の肥後銀行まえまで、道はばが広げられ、完全舗装されました。さらに昭和四十一年から四十三年にかけて、沼山神社まえまでの道路工事が行なわれ、りっぱな道路ができました。

また四十八年には、東野中学校まえの道も舗装され、町の中の道も、おおかた舗装されて、明るく、きれいな町になりました。くらしも、一そう便利になりました。



木山県道のように

四、子どものくらし

(1) 子どものくらし

てつだい 「沼山津よめに行くよりげずの木のぼれ」という言葉がのこっています。この言葉は、農家のくらしがまずしく、たいへんつらかったことを表しています。農家の人々は、朝早くから、腰をまげ、手を動かし、時間をおしむようにはたらきました。しかし、田一反から六俵ほどとれる米のうち、二俵は、得米として出さなければなりません。水害の年は、立ちすくむよりありませんでした。

このようなくらしの、家族の一人として、子どもたちも、てつだいをしました。草かり、ひえぬき、いねしの、麦しの、すいかちぎりなど、父母といっしょにはたらきました。沼山津あたりでは、六才ぐらいから、農作業のてつだいをし、稲かりの時には、学校は欠席ばかりだった、ということでした。

また、大豆しのの時は、日がのぼるときやがはじめてしまうので、日の出まえに、家族みんなでかりました。かった後は、ふりこを使って、しのをしました。ある時は、馬車にもみをつんで、父と一しょに、砂取や木山まで出かけました。精米所では、水車がまわっていました。

「ネンガラ」 そんなくらしの中で、子どもたちは、やはり子どもらしいあそびをしました。お宮は良いあそび場で、近くの子どもたちがよりあつまり、「ネンガラ」というあそびをしました。二十センチぐらいの木の棒をとがらせて、やわらかい地面につき立て、つぎにつき立てた人が、まえの棒をたおすと、それを、自分のものにすることができました。

水泳も、楽しい夏のあそびでした。三町内の土橋をスタード台にして、小学校の水泳大会も、行なわれていました。そのほか、魚つりはもちろん、せみとり、かぶと虫とりなどをしました。また、ちゃんかけ（こままわし）をしたり、手づくりの榎の実鉄砲や竹とんぼで、あそんだりしました。

(2) 秋津のまつり

つなひき 正月がすぎて、門松やしめなわをやく「どんどや」（ふつう、

「どんど」または「どんどやき」といって、十五日に行なわれる）が、十四日に行なわれ、十五日には、つなひきがありました。五、六年生が、家々をまわってなわをあつめると、年よりの人たちが、大づなによりあわせてくれます。大へんな力をこめてつくった、この大づなに、ふつうのなわを、かかりづなとしてかけ、それを、みんなで引くのです。

その日は、おとも子どもも、家族みんな出て、引きあいました。上沼山津と下沼山津の対抗で、大きなかけ声をあげながら、引きあいました。子どもたちも、顔を赤くして引きました。

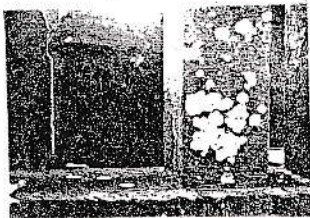
つなひきの終わったなわは、生垣のなわとして売られますので、そのなわ代で、五銭もんのせんべいやニッケ玉が、子どもたちにくばられました。

もぐらうち 冬休みのころ、子どもたちの行事に、もぐらうちがありました。もぐらうちというのは、わらをたばねて、なわをまきつけ、穂先をにぎって、地面にたたきつけるのです。農家の庭は、たいせつな作物をほすところですので、そこへもぐらがこないように、土をたたくのです。子どもたちは、晩になると、あちこちの家々をまわりました。上級生に下級生もまじって、元気にわらたばをたたきつけました。家々から、もちやおかしなどをもらい、分けあって食べました。

水神さまのまつり 三月九日は、中無田で、水神さんのまつりがあります。

長いあいだ、水害や水不足になやまされてきたむかしの人たちは、水の神さまをまつって、作物が良くできるようにいのりました。また、子どもたちが、水難にあわないように、といのりました。

観音さまのまつり 観音さまは、観世音菩薩といって、人々の不幸やくるしみをすくい、願いを聞きとどけてくださる仏さまで。この観音さまを、まつつ



水神さん

であるお堂が、二町内の火の見やぐらの近くにあります。村の人々は、まい年、三月十八日と七月九日におまつりをして、いのったり、お礼をのべたりしました。父や母は、子どもたちをまえに出して、おいのりをさせるのでした。

妙見さん 公民館まえの上田さんの家の近くに、妙見さんが、まつられていますが、妙見さんは、やはり、妙見ぼさつという仏さまで、水害や火事などから、土地や家を守ってくださいます。もともと、竹道原の川の近くにまつられていたのを、今の場所に移し、火事がおきないように、おまいりしてきました。沼山津に火事がなかったのは、この妙見さんのおかげだ、といわれています。

武内神社のまつり 農家のしごとにあわせて、早い盆をすまし、八月の「風まつり」に、風の害がないようにいのると、九月九日には、武内神社のまつりがやってきました。武内神社は、やはり、農家のしごとにかかわりの深い、馬の神さまをまつってあります。

まつりの日には、馬をつれて行って、おはらいをうけ、馬が病気になるないように、いのりました。その後、お宮のまえの道で、馬追いの行事が行なわれていました。馬のいななきや足音、いさましいかけ声が、耳に聞こえるようです。子どもたちにとって、それはもちろん、楽しい見物でした。

沼山津神社のまつり まつりのにぎわいは、子どもたちによってかき立てられます。武内神社と同じ日の沼山津神社のまつりでも、元気な子どもに育つようにと、すもうが行なわれていました。番づけもできた力士たちが、わざわざをきそいあいました。今は小さい集まりになってしまいましたが、まつりが終ると、よその村にも出かけて行って、しあいをしました。

この日、家々ではごちそうをつくり、お客さんをむかえました。二、三十人分ものおぜん立てをして、木山あたりからも、お客さんをむかえる家がありました。

宮座 月がかわって、十月九日には、宮座という行事がありました。朝早くから、お宮のまわりを美しくして、おみき、おかしらつき、お米、などをそなえます。おまいりがすむと、組々に集まって、ごちそうをこしらえます。それから、神さまにそなえたものを、ひとかけらずともらい、ごちそうを食べながら、むかしをしのんだり、歌を歌ったりしました。その家の木戸口には、しめかざりなどもあって、人々の神さまに対する気持ちが、表されていました。

地藏尊まつり 十一月二十四日の地藏尊まつりは、子どもたちに、もっともかわりの深いまつりでした。また、まつりの日でなくとも、道ばたであそぶ子どもたちにとって、お地藏さんは、身近な仏さまでした。

まつりの日が近づくと、その年に赤ちゃんの生まれた家では、「奉納はた」を寄進するならわしでした。タオルの半分ほどの白いぬのに、「奉納」とすみで書き、左下に、赤ちゃんの名前を書きます。そのぬのの上の方を、細い竹にくくり、地藏尊のうしろの、高いところにさげます。これは、赤ちゃんが、元気で大きく育つように、とねがったことでした。また、地藏尊のまえには、子どもの背の高さほどの「花立て」を、左右二本立て、それぞれの家から持ちよった、きくの花などでかざりました。「花立て」は、竹の節ごとに切り口をいれて、花をたくさんかざれるように、つくってありました。

まつりの日、学校から帰ると、子どもたちは地藏尊のまえに集まって、うきうきした気持ちで、あそび過します。地藏尊には、まんじゅうやおかしやみかんなどが、そなえられています。夕方になると、お坊さんをむかえ、お経をあげてもらって、一しょにおまいりします。

それから、楽しいひとときでした。年ごとにじゅんばんでめられた家や、子どもたちみんなをまねき、ごちそうするのです。夕食のほか、甘酒やおそなえもののおかしなどが出されます。子どもたちは、生々とはしゃいで、おなかいっぱい食べ、また地藏尊のまえで、すっかりくらくらしても、あそ

び過します。

今、三町内には、いくつものお地藏さんが、道のかどにまつられています。それは、むかし二町内が、中小路、西小路、北村、洲崎の四つの地区に分かれていて、それぞれの組で、お地藏さんのまつりをしていたからです。

五、秋津の遺跡

貝原 木山川ぞいの東部汚水処理場のあたりを、貝原とよんでいます。それは、このあたりの土の中から、貝がらがたくさん出て来たからです。処理場の工事のときには、貝がらにまじって、土器のかけらや、大むかしの人の骨も、ほり出されました。このことから、大むかしは、このあたりまで海が入りこんでいたのだらう、といわれています。

沼山津縄文遺跡 また、沼山津神社のあたりからも、大むかしの人々が使ったと思われる、石のおのが見つかりました。大むかしのそのころは、縄文時代といって、人々は木の実を食べたり、魚やうなぎなどをとって、くらしていました。まだ、金物を使うことを知りませんでしたから、どうぐはみな、石や骨や、木や貝でつくりました。この石のおのも、その一つです。沼山津神社のあたりには、大むかしから人々が住んでいて、木を切ったりけずったりして、家や丸木舟をつくったのでしょう。

上津代里・中津代里・下津代里 沼山津には、とおいむかしから人々が住んで、国のきまりにしたがって、くらしていました。今から千百年ぐらいいえの大化の改新のころ、沼山津は、三つの地区に分けられて、税金をおさめていました。そのときのなごりが、今も地名としてのこっています。

上津代里は、県道小池・竜田線の東がわ、武内神社に近いあたり、中津代里は、沼山津会所（後ののべる）のあと近くで、下津代里は、二町内公民館のふきんになります。

三官屋敷 赤井川と新左衛門堀にはさまれた、小さな計路川の北のきしで、今は水田になっているところを、三官屋敷といっています。まわりは水田ばかりのところですから、屋敷（家のこと）があったとは思えないのですが、むかしは、人々が家をたてて、そのあたりに、住んでいたのかもしれない。ほかに、中無田にも、「仰々の屋敷」という、土地の名があり、そこには、むかし屋敷がありました。

ずっとむかし、このあたりまで入りこんでいた海が、陸地にかわり、東の方の山の中を流れていた川が、土地のひくいところに流れこみました。そこで貝原あたりに住んでいた人々は、南の方の、このあたりの土地に、うつり住むようになりました。

ところが、加藤清正の時に、木山川を北に、矢形川を南にうつし、江津に堤防をつくりましたので、このあたりは、水びたしになるようになり、またも、北の方にうつり住まなければならませんでした。

沼山津手永の会所あと 二町内の浄福寺まえを、二百メートルばかり東へ進むと、左がわに、えのきの大木がしげっています。そのあたりが、ふきんの人が「会所んあと」とよんでいる、沼山津手永の会所のあとで、古い井戸や、石垣の根っこがのこっています。

加藤清正の後に、細川氏が熊本をおさめるようになると、「手永」という政治のしくみをつくりました。手永は、二十から三十もの村がまとめられたもので、さらに、いくつかの手永がまとめられて、「郡」となっていました。その村の代表が「庄屋」、手長の長が「惣庄屋」、そして郡の長官が、「郡代」といって、それぞれ、おもい役目の仕事をしていました。

わたしたちの秋津村が入っていた沼山津手永は、木山・津森から白川べりの戸次・曲手などにおよぶ、たいへん広い手永でした。その中には、たくさんの村がふくまれていましたので、中心となって仕事をする役所があり、多くの役人たちがいました。その役所が「会所」であり、年ぐ米の取り立てや悪人の取りしまり、さいばんなど、いろいろな仕事をしていました。今でも、「門前」とか、「仕置場」というところなどがのこっていますが、むかしは、広い敷地に、大きなたて物がたっていました。

船つき場 会所あとから、南へ五十メートルほど行くと、木山川のきしに、大きなえのきが二本、あたりいっぱい、枝をのばしています。そこは、むかしの船つき場があったところで、今も、白かべの大きな蔵がのこっています。

す。



むかしの船つき場

今のようす

江戸時代の木山川は、深さが三メートルもあり、ゆたかな水が加勢川に合流し、川尻の方へ流れていました。その川を、十トンもの大きな船が、白い帆をあげて行き来しました。沼山津手永の農作物が川尻へはこばれ、川尻からは、さけのかすや石灰などが、船につまれました。

これらのことは、すでに、「川の交通」のところにのべましたが、船つき場では、たわらをついだ人たちが、ひとりずつ、蔵のくぐり戸をとり、石だんをおりて、船につみこんでいました。

この船つき場の仕事をはじめたのは、吉村和三郎という人で、仕事は、たいへんきかんになっていました。しかし、二代目の初五郎という人のおかげで、木山県道ができ、馬による陸の交通はたつして、川の交通が、だんだんおとろえ始めました。農作物が馬車ではこばれるようになると、船が来なくなり、とうとう、船つき場の仕事は、なくなりました。

今は、草がいっぱいしげって、石だんも石垣も見えなくなり、むかしの船つき場のにぎわいも、そうぞうできませんが、また、草をとり、川をほって船つき場をもとのすがたにしようと、計画されてもいるのです。

天神木 むかし、天神丸という船がやって来て、わたしたちの秋津校があるあたりの、大きな木につなぎました。どこからやって来たのか、わかりませんが、きっと、めずらしい船だったのでしょう。それで、秋津校のあるあたりの土地を、天神木といっていました。

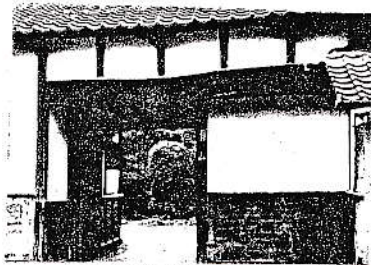
弥富邸 木山川（今の秋津川）にかかっている「下ん橋」のすぐそばに、

大木がしげり、長いへいにかこまれた、大きなお屋敷があります。そこは、「西の弥富さん」とよばれる弥富邸で、ご主人の秀次郎さんは、十六代目にあたられます。

今から五百年ばかりまえの戦国時代、弥富家は、大分県の宇佐地方で、「滝貞の城主」として、さかえていました。五代目の時に、肥後の国（熊本）にうつり住み、七代目から、この沼山津に住むようになりました。その後、弥富家は、「郷士」として細川藩につかえ、二百石をあたえられていました。弥富家の古い記ろくによりますと、村は、「水とのたたかい」にのべたように、たびたび、ききんにおそわれました。こう水や台風、虫や病気のために、作物が実らず、食べるものがなくなってしまうのです。そんなとき、弥富家では、家の米倉をひらいて、村の人々にあたえ、すくって来たのでした。また、十三代の弥富道雄は、横井小楠と、たいへん仲よしで、村のくらしを良くすることや、国の政治などについて、語りあっていました。

弥富さんのお屋敷は、江戸時代の「郷士」の屋敷です。明治十年の西南の役のことを書いた、徳富蘆花の「灰じん」という小説に、切腹の場面がありますが、これは、弥富さんのお屋敷が、モデルになっています。ほかに、志内邸、富沢邸などがあり、庭やたてものから、むかしのようすを、しのぶことができます。

志内邸 江戸時代に、細川氏が、京都から肥後の国の大名になって来たとき、志内家の祖先も、細川中老小姓として、いっしょに肥後に来ました。七代目の、志内新兵衛という人で、津森の田原に住みました。その後、九代目の志内和三郎という人のときに、沼山津の今の場所にうつり住み、無双流という、剣道の先生をしていました。むかしのよろい、かぶと、やりなど



今の志内邸（昭. 5 3. 9 うつす）

が、今も志内家にのこっています。

また志内家では、農業も手広くやっておりました。四十町歩もある田や畑を、たくさんの人をやとってたがやし、作物をつくっていました。仕事に使う牛や馬が、八頭もいました。しかし、太平洋戦争後の、「農地改革」という新しいいきまりのために、田や畑は、ほとんどなくなってしまいました。

横井小楠と四時軒 秋津小学校から、五百メートルほど東に行くと、校歌



（1809～1869）に歌われている、四時軒（小楠塾）があります。そこは、横井小楠のすまいのあとです。小楠は、文化六年（一八〇九年）に、今の熊本市内坪井町に生まれました。おとうさんは、肥後藩のさむらいでした。小楠は、子どもころの名を又雄といい、八才のときに、

時習館という藩校（学校）に入りました。学問がすきで、よく勉強しましたので、二十九才のときには、塾長（今の校長先生）になりました。小楠は、そののちも、学問にはげみました。江戸（東京）に出て、すぐれた学者と話しあったり、熊本に帰って、なかまと研究会をつくったりしました。

小楠が四十六才のとき、おにいさんがなくなったので、家をつぐことになりました。しかし、多くの家族をかかえて、城下町では苦しい生活でしたから、くらしやすい、いなかの沼山津に、うつり住むことにしました。安政二年（一八五五年）、四十七才のときのことでした。

今のこっている四時軒は、その玄関と客室、それに板の間だけです。そのころは、ほかに、家族の居間や、塾生（小楠の生徒）が勉強する、塾棟などがありました。小楠は、この家に、四季（春・夏・秋・冬）のけしきが、いつも美しいところ、という意味で、四時軒と名づけました。

小楠の教えは、「今までの、日本人の心がけを生かして、国のきまりをつくらう。しかし、電燈や汽車もない日本に、西洋の文明は、取り入れなければ

ばならない。そして、世界の人々が、正しく、なか良く、くらしでいける世の中をつくって行こう」というものでした。

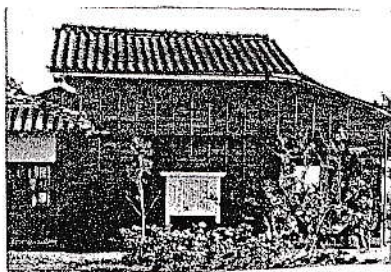
小楠のこの考えを生かして、なかま（実学党）や弟子たちは、おくれっていた熊本に、医学校や洋学校をつくったり、工場をたてたり、西洋の牛や植物を、取り入れたりしました。また、小楠のすぐれた考えを学ぼうと、国内のあちこちから、多くの人が、四時軒をたずねて来ました。土佐（高知県）の坂本龍馬なども、そのひとりです。

小楠は、越前藩（福井県）の殿さまからまねかれて、藩のおさめ方に、ちえをかしたこともあります。新しい明治の世の中になると、参与（大臣）として、政府にむかえられました。そして、右大臣・岩倉具視のそうだん役としてかつやくしました。

しかし、明治二年一月五日、（新暦の二月十五日）太政官（役所）から帰るとちゅう小楠は、京都の丸田町で、小楠に反対する人々におそわれました。小楠はかごから出て、短刀をぬき、六人をあいてにたたかいましたが、年もとり、病気のあとでもありましたので、ついにたおされてしまいました。六十一才でした。

京都の南禅寺天授庵に、墓があります。かなしんだ弟子たちは、小楠のかみの毛を持ち帰り、今の小楠公園に墓をたて、手あつくほうむりました。そして、数多くの人々が、その教えを受けついで、新しい世の中のために、はたらきました。

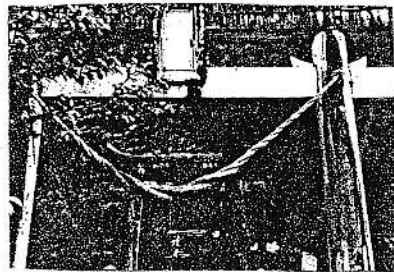
今、小楠公園には、いはつ塔のほかに、五十年記念の表しゅうひや、百年祭のときにつくられた、銅像が立っています。まい年、二月十五日には、いれい祭が行なわれ、わたしたちの学校の代表も出席して、横井小楠についてのお話を、聞くなりわしになっています。



四時軒

六、秋津のお宮とお寺

沼山津神社 沼山津神社は、木山県道と小池竜田線の交差点の近くにあります。むかしは、たくさんのお木々にかこまれて、深い森のようでしたが、だんだんと、人が近くに住むようになりました。



おもての鳥居はまだ新しく、「沼山津神社」と書かれています。この鳥居もたて物も、明治四十三年につくられたものです。しかし、中の石だんをのぼると、もう一つ古い鳥居があつて、「権現宮」と書かれた、石の額がかかげられています。「権現」というのは、仏さまがすがたをかえて、日本にやってくる、神さまにおなりになったお方のことです。

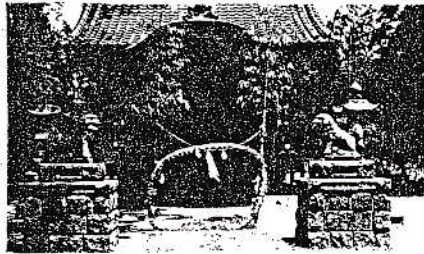
この古い鳥居の柱には、文字がほられていて、二百年もまえから、お宮があつたことがわかります。おいのりをするたて物に、「絵馬」といわれる額が、四まいかかっています。これは、むかしの人々が、いのりやお礼のしるしとして、神社におさめたものですが、この絵馬にえがかれた絵から、むかしの人々の気持ちを知らることが出来ます。一ばん古いものには、武内宿弥と応神天皇の絵が、えがかれています。

また、おいのりをするたて物の左がわに、石の柱があつて、このお宮のれきしがきざまれています。それによると、熊野宮から分れたお宮が、明治のすえに、今の場所にうつつて来たのだそうです。（嘉島村の浮島権現の分霊）武内神社 沼山津神社から南の、東入小路のおくに、武内神社があります。もとは、年禰社とよばれていましたが、明治になって、武内神社となりました。

この神社は、牛や馬の神さまをおまつりしてあり、農家の人々にとって、たいせつな神社でした。だから、おいのりをするたて物の天じょうには、た

くさん馬の絵がえがかれてあり、おさめられている「絵馬」も、みんな馬の絵です。

・年福社：「年福」は「福宜」から変ったものであろう。「福宜」とは、「折り」の意味である。



中無田熊野神社 秋津町秋田の中無田に、熊野神社があります。これは、大もとになっている熊野権現のみたまを分けてお祭りしてある、権現宮の一つです。

昭和三十七年に、三百五十年祭がありましたので、このお宮ができたのは、慶長十八年（一六一三年）ということになります。しかし、お宮の庭にのこっている古い燈ろうに、一七三七年という文字が見えるだけで、それいぜんのものはありません。庭にある大きなむくの木が、三百五十年もむかしからのことを、みな知っているのでしょうか。

光輪寺 沼山津上津代里にある光輪寺は、順信というおぼうさんが、元文四年（一七三九年）にたてたもので、日本ではじめての「大師号」をもつ、慈覚大師のつくられた阿弥陀如来さまを、おまつりしてあります。

むかし、この寺は、「千福庵」といって、別の如来さまをおまつりしてありましたが、小西行長という殿さまがいくさをしたとき（一五九〇年ごろ）たて物は、みんなやけてしまいました。しかし、如来さまだけは、はこび出すことができ、この如来さまも、安置してあります。



光輪寺の本堂

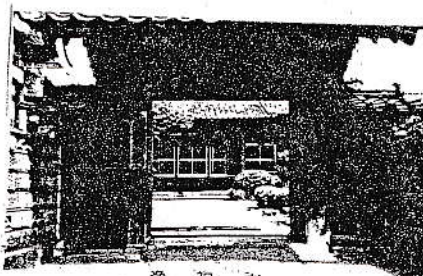


竹内神社

光輪寺となって、今のご住職山田法川師は、十二代目だそうです。代々のおぼうさんの中に、「流星ぼうさん」といわれた人がいました。このおぼうさんは、気のあらい、元気のよい人で、けんかが大好きでした。きんじょのえらい人や、力のつよい人と、はげしいけんかをよくしましたが、まけたことはありませんでした。もともと、細川公につかえていた人で、細川公からもらった短刀を、衣の下にさしていました。また、熱いおゆの中に手をつっこんだり、耳たぶに、お寺のかねをさげたり、うでに針をつきさしたり、かわったことをして、村の人々をおどらせていました。

そのころ沼山津では、花火を自分で打ち上げ、みんなに見せる遊びがはやっていました。夏の夕方には、あちこちで、花火があがりました。ところで、この「流星ぼうさん」のあげる花火は、その気しように、に、「バーン」と大きな音をたて、まっすぐ上にあがっていくのでした。それで、近くの人たちから「流星ぼうさん」とよばれるようになり、大へん人気がありました。

浄福寺 沼山津会所あとから、西へ三百メートルほど行ったところに、浄福寺があります。この寺は、元亀二年（一五七一年）にたてられたものです。が、はじめは、今の火の見やぐらのよこの、お堂があるあたりにありました。しかし、千福庵とおなじように、小西行長のいくさのため、寺は、全部やけてしまいました。そのとき、この寺でもまた、慈観というおぼうさんが、やっと仏像だけを持ち出して、土の中にうめておきました。



浄福寺

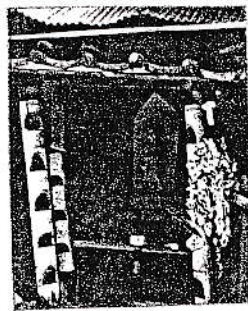
その後、観清というおぼうさんが、仏像をほり出して、今の浄福寺をたて、おまつりしましたが、弟子の秀海というおぼうさんは、慶長十八年（一六一三年）に、「浄土真宗」というものにあらため、初代の住職になりました。今の住職の浄住護雄という人は、十代目だそうです。

寺のうらに広い墓地があり、二、三百年もむかしからの、古い墓がたくさんあります。その中には、弥富家の墓もあります。しかし、だれの墓か、わからないものも多いそうです。

中津代里地蔵 地蔵は、地蔵尊または地蔵ぼさつといわれる仏さまで、しかがなくなつてから、みろくぼさつがあらわれるまで、人々をすくう、といわれています。その地蔵が、中津代里の道ぞいに、三つあります。一つは、会所あとの井戸の南にある、小さな道に立てられています。高さ四十センチほどの地蔵で、背中に、寛政五年（一七九三年）三月に立てた、と書かれています。

つぎの地蔵は、会所あとから西の方の、小さな道のかどにあり、れんげ（はすの花）の上に、立てられています。やはり背中には、文化十五年（一八一八年）五月・弥富、と文字がきざまれています。弥富家の人が立てたものです。

さらに西の方に行くと、南へはいる小さな道のかどに、三ばん目の地蔵があります。三だんにつみ上げられた石垣の上に、すわっています。慶応三年（一八六七年）十月の日づけがあります。



中津代里地蔵

地蔵は、子どもと、深いかかわりがあります。むかし、悪い病気がばやり子どもがたくさん死んでいきました。今の医学ではなれる病氣も、そのころは、なおすことができませんでした。また、医者にかかることができず、死んでいく子どももいました。それから、思いがけないこともありました。夕方、川に洗ひにつれて行った馬が、自分かたてに走って帰ることもあって、馬にけられてけがをしたり、死んだりする子どももありました。それで、子どもを守るために、また、なくなった子どもをまつるために、あちこちに地蔵

がたてられたのだ、ということですが。

今では、きんじょのお年よりが、花をさしたり、水をかえたりして、地蔵の世話をしております。

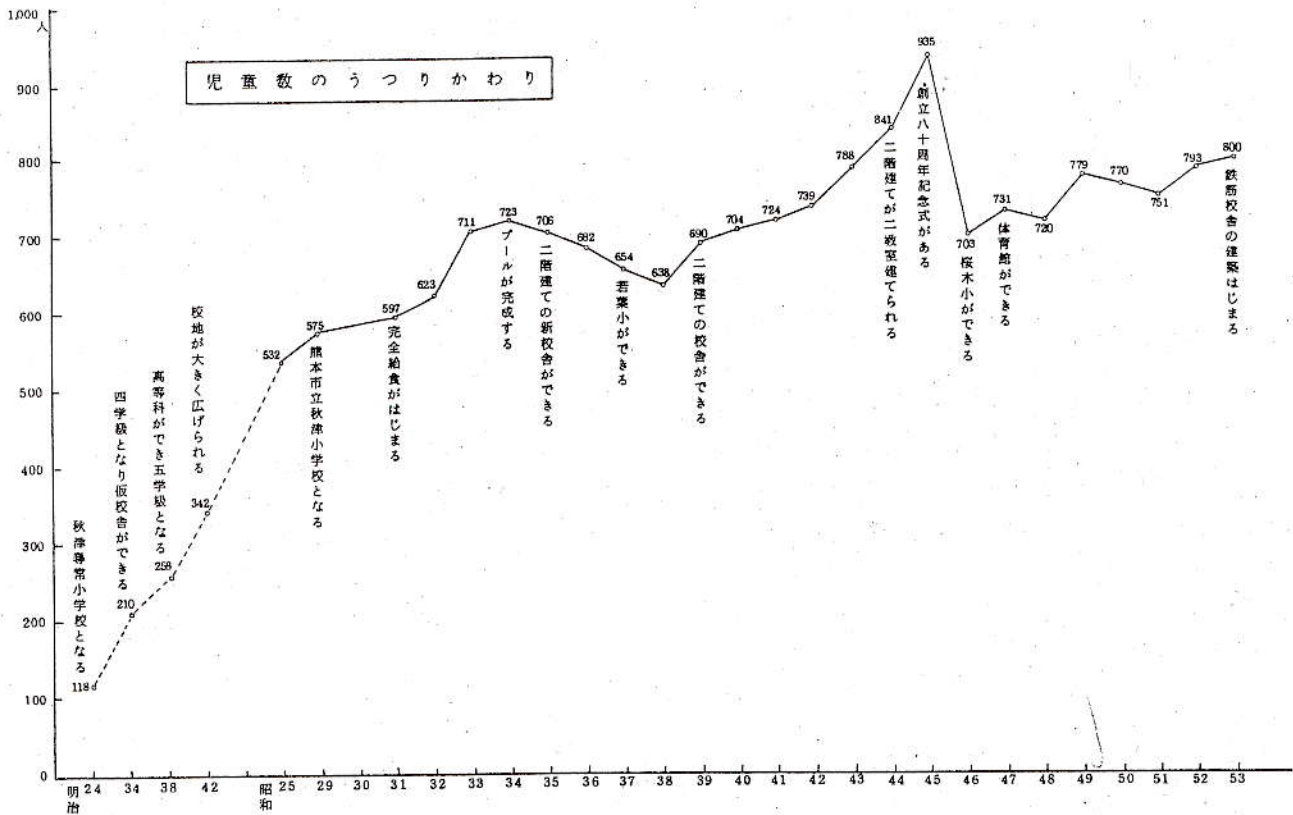
彼岸地蔵 今、蔵田さん宅のまえにたっている地蔵は、「彼岸地蔵」といわれています。この地蔵は、もともと、汚水しより場近くの川のそばに、立ててあったものです。

この汚水しより場のあたりが、「貝原」とよばれるということは、すでにのべました。むかし、このあたりをほると、人の骨もたくさん出て来たそうです。それで、この死んだ人たちをまつるために、弥富家の人が、地蔵を立てました。

ところが、まい年、秋になると、この地蔵のまわりに、赤や白の彼岸花が、いっぱい、みごとに咲くのでした。それでこの地蔵は、彼岸地蔵とよばれるようになりました。

うぐいす観音 今から四百年以上もむかし、泉が丘小学校のところに、ふつう「うぐいす城」とよばれた、「陣内城」という城がありました。そこには、御船城主・甲斐宗運の身内の、甲斐正運という殿さまがいました。この殿さまは、城を守るために、洞春というおぼろさんをまねいて、「黄鳥山法光寺」という寺をたてました。この「黄鳥」も、「うぐいす」を表しているのですが、豊臣秀吉とのいくさのときに、城も寺もやけ、甲斐家はほろびてしまいました。その後、加藤清正のころになって、寺のあったあたりに、「野原山放光庵」がつくられ、観音さまがまつられました。

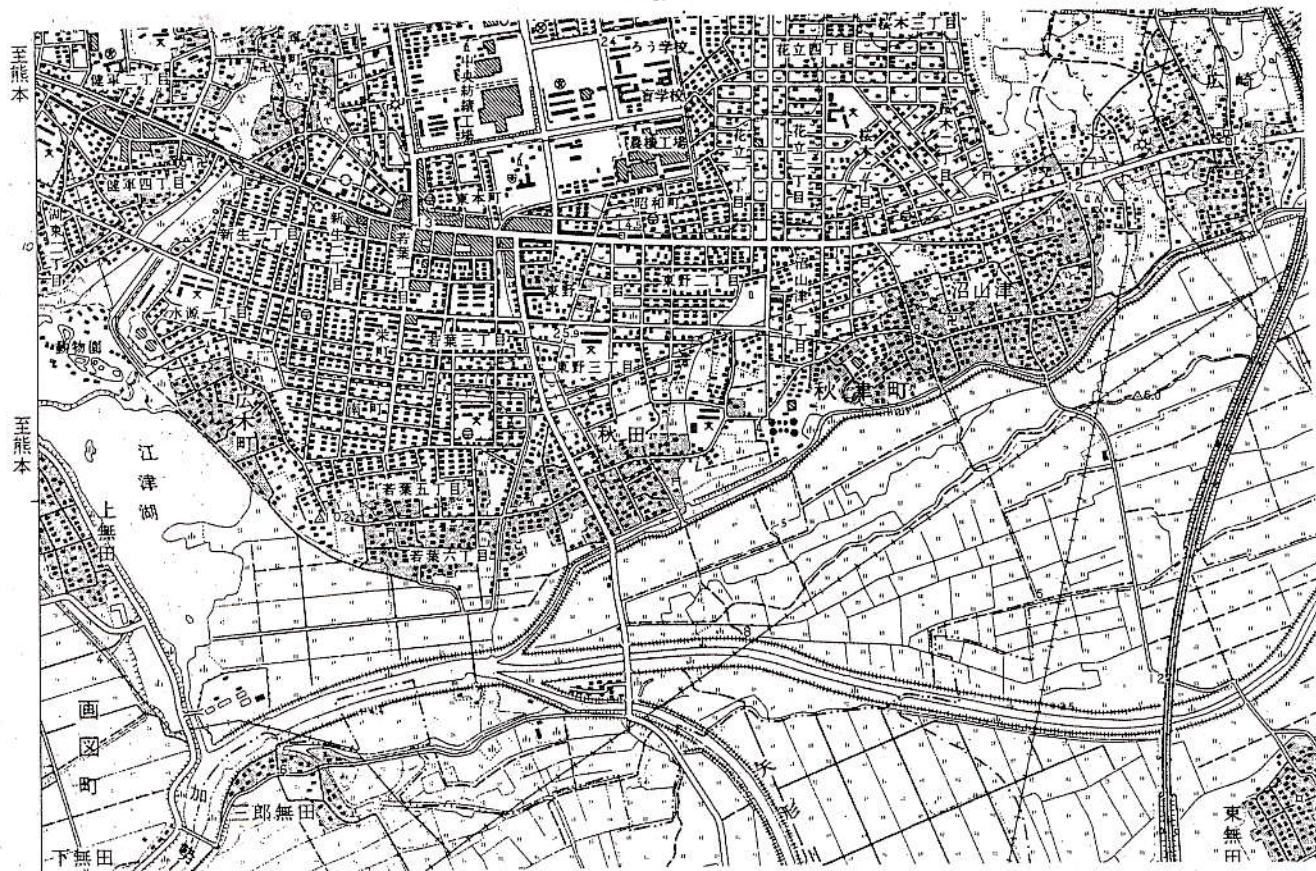
秋津校の西の方、五分ばかり歩いたところに、「うぐいす観音」といわれる、小さなお堂がありますが、そのあたりが、「野原山放光庵」のあったところですが。三月と八月の、うぐいす観音のまつりは、むかしは夜市も立ち、たいへんにぎわいました。今は、「うぐいす川」「うぐいす原」というよび名に、わずかに、れきしがのこっているだけです。



町や学校のうつりかわり (年表)

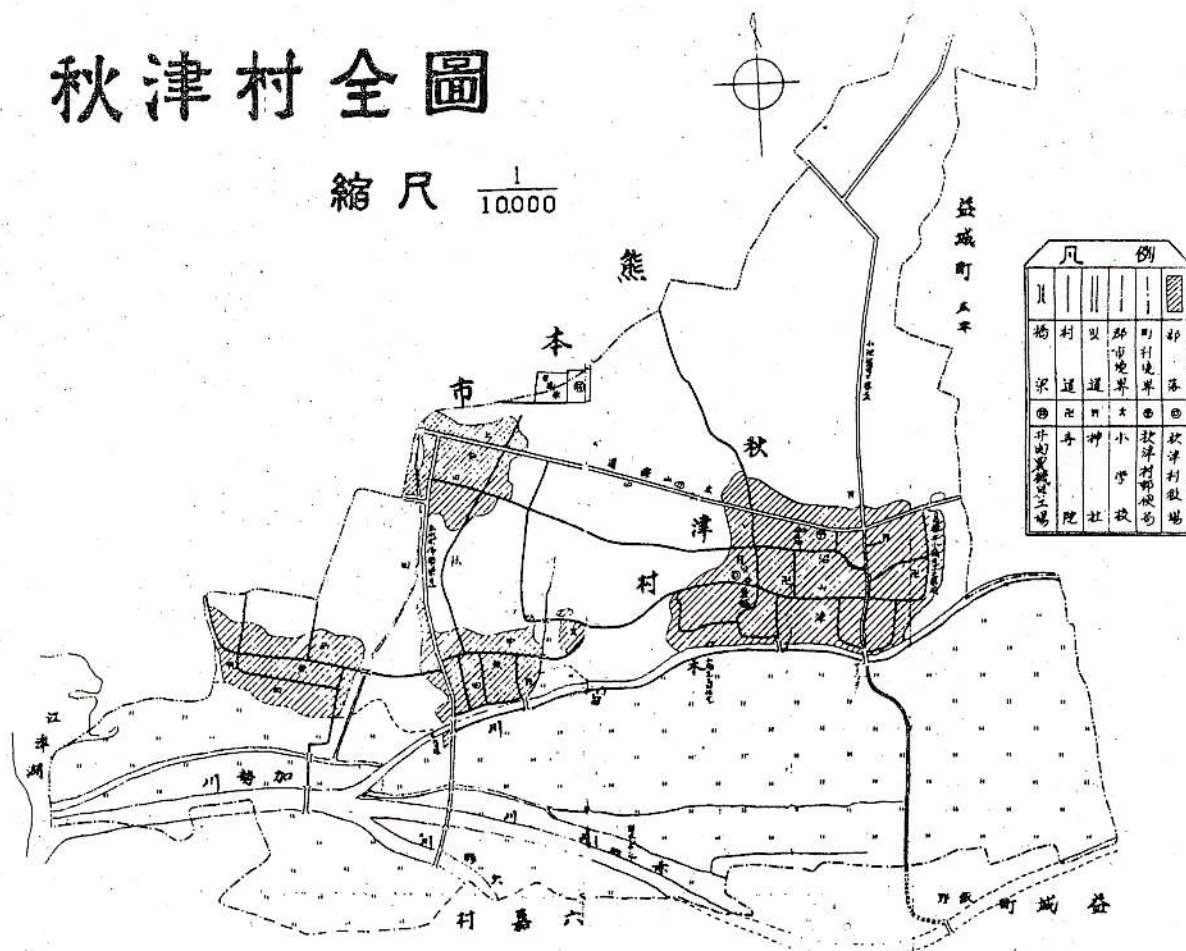
時代	年号	西暦	町のうつりかわり	年号	学校のうつりかわり
原始			・縄文時代に人々が暮らしを始めている。		
大和					
奈良	大宝一	七一	・大宝律令により国郡の制がしかれる。		
平安					
鎌倉					
室町	大永二	一五二	・沼山津神社が建てられる。		
桃山	元亀二	一五七	・浄福寺が再建される。		
	天正二五	一五七	・加藤清正・小西行長入国する。益城郡は小西行長の支配下になる。		
安土	文禄二	一五九	・上沼山津に光輪寺再建される。		
戸	慶長		・加勢川の大堤防ができる。		
	慶長二八		・中無田熊野神社が建てられる。		
			・沼山津手水の会所ができる。		
江	寛政		・シンジャー堀ができる。(新左衛門堀)		
	文化		・万歳井手ができる。		
	安政二		・横井小堀が四時軒を開く。	慶応	・沼山津と秋田に寺小屋が開かれる。

時代	昭和	年号	西暦	町のうつりかわり	年号	学校のうつりかわり
		一六	一九二一		一六	・秋建国民学校と改められる。
		一九	一九二四		一九	・三菱よりおくられた二教室が建てられる。 (昭五三解体)
		二〇	一九二五	・太平洋戦争がおわる。	二〇	・分教教育がおこなわれる。
		二三	一九二七	・赤井川堤防に排水用の動力ポンプをつける。	二三	・六・三制が実施され秋津小学校となり、中学校も併設される。(昭二九まで)
		二六	一九三〇			
		二九	一九三三	・樋門の増設と排水路工事(六反堀)がおこなわれる。	二九	・熊本市立秋津小学校となる。
		三二	一九三五	・秋津村は熊本市に編入される。	三二	・給食室ができ完全給食がはじまる。
		三三	一九三六		三三	・作文の研究発表会が開かれる。
		三四	一九三九		三四	・プールが完成する。
		三五	一九四〇		三五	・二階建ての新校舎ができる。(教室五、職員室、校長室、事務室、保健室)
						・校旗と校歌ができる。
		三七	一九四二	・若菜小が新設され西無田地区がわかれる。		
		三七	一九四二	・東野中学校が新設される。	三九	・二階建ての校舎ができる。(六教室)
		三九	一九四四		四一	・音楽教育発表会をひらく。
		四一	一九四六	・秋田地区の区画整理が行なわれ、町名が変更される。 (東野〇丁目)		
				・この頃、木山県道がひろげられ全面舗装される。	四二	・上水道が学校までひかれる。
		四二	一九四七	・市営バスが秋津支所までのびる。	四四	・二階建てが建てまされる。(二教室)
		四四	一九四九		四五	・創立八十周年記念式がおこなわれる。
		四六	一九五二	・桜木小ができ木山県道以北は桜木校区となる。	四七	・体育館が完成する。
		四七	一九五三	・東部污水处理場ができる。		・国語教育の研究発表会をひらく。
					五二	・ミニバスケット全国大会に出場する。
		五二	一九七七		五三	・鉄筋校舎の建築がはじまる。
		五三	一九七八	・熊本市の人口が五十万人をこえる。		

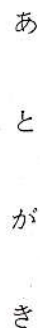


秋津村全圖

縮尺 $\frac{1}{10,000}$



東三拾貳町三拾間
南三拾伍町四拾間



昔のことを調べながら、先生たちもずいぶん勉強しました。

この本を読むみなさんも、すすんで秋津の町を調べ、考え、住みよい町に
してくれと思います。

なお、「うつりかわる秋津」を作るために指導いただいた、前田一洋先生（東町小）、全文を稿正、執筆された安元輝雄先生（秋津小）をはじめ、苦勞を共にされた先生方に感謝したいと思います。（社会科主任 杉本 学）

この本を作った先生

— 49 —

参 考 資 料

肥後国誌 上益城郡誌 秋津村略史 熊本県の歴史(森田誠一)
秋津(八十周年記念誌) 熊本市史 熊本歴史散歩(荒木精之)
熊本市東部地区文化財調査報告書(市教委) その他

資料提供者(敬称略、順不同)

北野ミコ	浄住護雄	浄住トリ	志内克彦
高宮隆則	富島勇	西村忠之	村上茂継
弥富秀次郎	吉村伸次郎	吉村勇一	吉本喜世記
山田法川			